

第1期介護福祉実習における介護技術の実施に関する実態調査

丸 山 順 子

Jyunko MARUYAMA

南 原 友 枝

Tomoe MINAMIHARA

1. はじめに

介護技術の目的は、介護学生に対象者の日常生活を支えていくために科学的根拠のある基礎知識・技術を身につけ、対象者への配慮等の態度を育てることである。そして、介護福祉実習の目的は、学内で学んだ知識・技術に基づき、実践を通し対象者と人間的な関わりを深め、生活上の介護ニーズを理解し、その具体的解決方法を身に付けていくところにある。当短大の介護福祉学科は、二年間でV期に分けて介護福祉実習を行っている。

第1期の介護福祉実習（以下1期実習という）は、介護学生が入学約2ヶ月後に5日間行う。その目的は、「1、施設の高齢者の日常生活を理解する。2、介護の現場を知る。3、介護福祉士を目指す動機付けとする。」である。高齢者の日常生活や介護の現場を知るために、施設利用者と接し、見学または、実施可能な介護を行う。しかし、入学約2ヶ月後であるため、実施可能な介護技術は少なく限られている。このような実習を介護学生は約40施設にわかれて実習する。実習施設が多いため、学生の介護技術における経験内容は、さまざまである。この状況を把握する上で、これまでに1期実習の目的にそった実習内容を把握できても、介護技術の経験についての客観的データはなかった。さらに、昨年、学生の介護事故の実態を調査した結果、半数以上の学生が実習中に介護事故につながるような危機を感じた経験があり、医療的行為の技術に関する実施が高い確率でなされているという結果が出た¹⁾。このようなことから、実習における介護技術の実施状況を把握し、介護福祉教育の介護技術の内容と1期実習の実施状況を検討することは、学生に必要な介護技術の習得を目指すうえからも重要であると考ええる。

そこで、1期実習における介護技術の実施に関する実態を調査した。介護福祉実習における介護技術の実施内容について考えた。さらに、1期実習において未履修の介護技術の実施体験をした後に履修した場合の学習効果についても調査したので、ここに報告する。

2. 研究方法

1) 対 象 者・・・当短大の介護学科1年生101名

2) 実施方法・・・アンケート調査(2回)

3) 実施時期・・・一回目のアンケート調査は、1期実習終了後の介護技術の時間に実施。

二回目のアンケート調査は、「入浴、排泄の介護」の介護技術の履修後に実施。

4) 調査内容

(1)一回目のアンケート調査

アンケートの介護技術項目は、教科書を参考にした。項目は、ベッドメイキング、環境整備、体位変換、車椅子への移乗、車椅子の移動、ストレッチャーの移送、歩行介助、食事介助、トイレ誘導、ポータブルトイレの介助、おむつ交換、衣服の着脱、洗顔、爪切り、口腔ケア、義歯の取り扱い、罨法、バイタルサインの測定、与薬、感染予防、コミュニケーションの21項目を抽出した。

各項目毎の実施状況を把握するために「実施なし」「説明を受けた」「職員と一緒に実施した」「一人で実施した」の4段階に区分し該当するところに○印をつけることとした。

1期実習までに履修した項目は、ベッドメイキング、環境整備、食事、移動(車椅子、ストレッチャー)、コミュニケーションであった。この履修した介護技術について、「できた」「まあまあできた」「どちらともいえない」「ややできなかった」「できなかった」の5段階で自己評価した。また、この項目毎に、学内で学んだどのような点が実習に生かされたのかについて自由筆記とした。

(2)二回目のアンケート調査

おむつ交換、入浴の技術について、講義、方法、介助役、利用者役に分け、それぞれの項目が理解できたかどうか把握するため「できた」「まあまあできた」「どちらともいえない」「ややできなかった」「できなかった」の5段階で自己評価した。1期実習の経験別(「実施なし」「説明を受けた」「職員と一緒に実施した」「一人で実施した」)にわけ、比較検討してみた。また、1期実習の実施体験で、実施してみてよかったことと実習と講義・演習内容との違いや混乱したことを自由筆記とした。

3. 結果

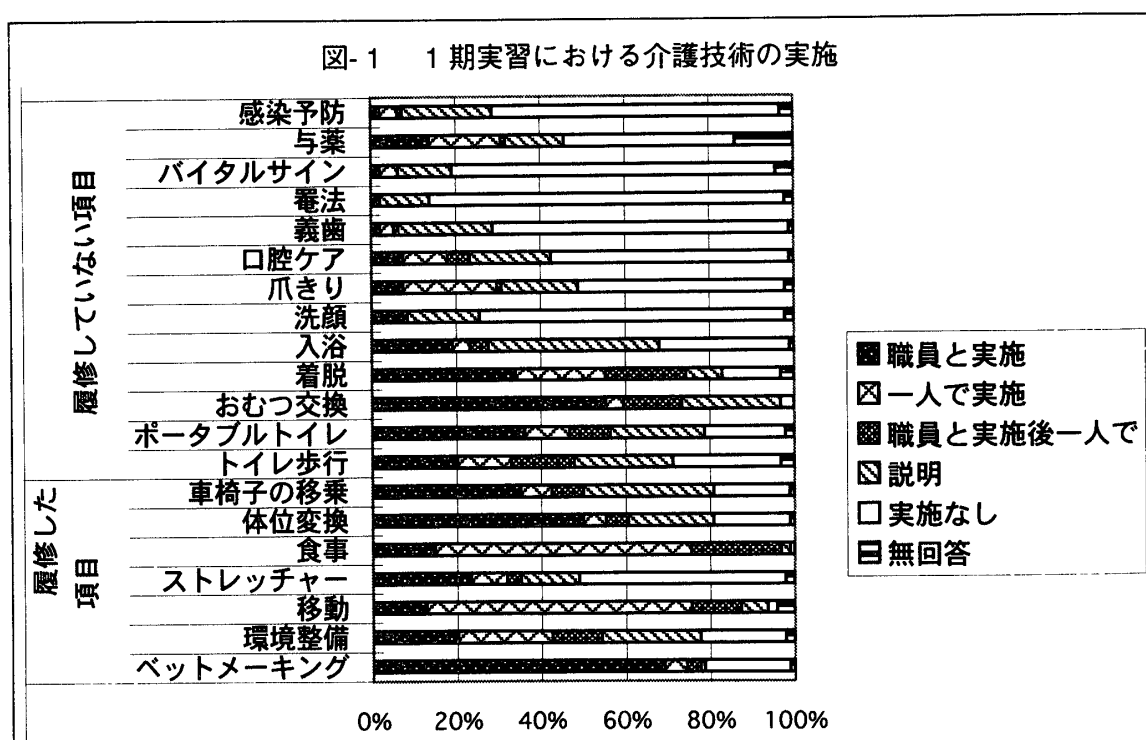
アンケートの回収率は、一回目は94名で93.1%、二回目は98名で97.0%であった。

1) 1期実習の介護技術の実施

介護技術の履修済みの項目について、1期実習中の実施率は、多い順に食事(91名、96.8%)、車椅子の移動(82名、87.2%)、ベッドメイキング(73名、77.7%)環境整備(51名、54.3%)、ストレッチャーの移動(33名、35.1%)だった。(図—1) この結果は、「職

員と一緒に実施」と「一人で実施」した人数を合計である。そのうち、1期実習中に学生一人で実施したことのある介護技術は、食事（77名、75.5%）、車椅子の移動（70名、75.5%）、環境整備（32名、34.0%）の順であった。

介護技術が未履修項目のうち実施率は、多い順に着脱（70名、74.5%）、おむつ（69名、73.4%）、体位変換（57名、60.6%）、歩行介助（57名、60.6%）だった。この値は、「職員と一緒に実施」と「一人で実施」した人数の合計である。そのうち、1期実習中に学生一人で実施したことのある介護技術は、多い順に歩行介助（49名、52.1%）、着脱（38名、40.4%）、トイレ介助（26名、27.7%）、爪切り（22名、23.4%）、与薬（17名、18.1%）であった。



2) 1期実習において履修した介護技術についての学生の自己評価

学生が、1期実習で履修した介護技術について自己評価し結果を集計した。（図-2）「まあまあできた」、「できた」と回答した学生は、合わせてベッドメイキングで43.6%、環境整備で31.9%、車椅子の移動で81.9%、ストレッチャーの移動で16.0%、食事で72.3%、コミュニケーションで69.1%であった。そのうち、値の低い環境整備、ストレッチャーの移動については実施しなかったケースが多かった。

履修した介護技術が、実習場面で生かされた点を自由筆記にした点についてまとめた。

（表-1）

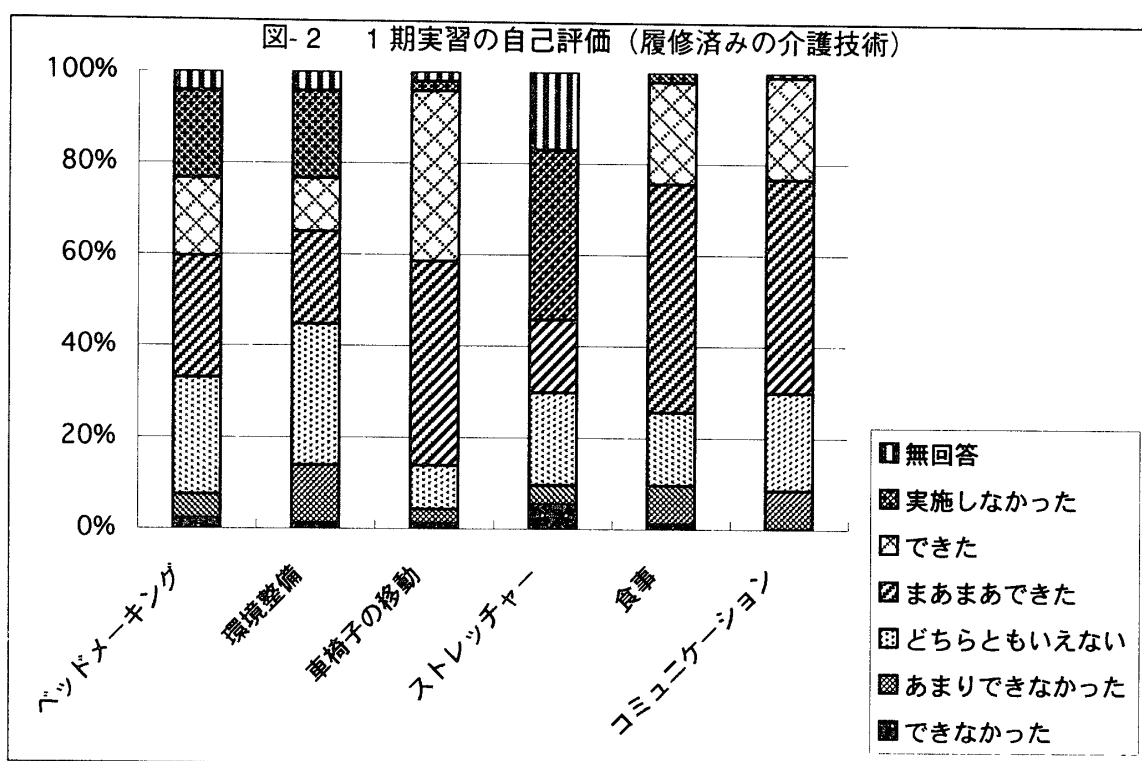


表-1 1期実習で履修した介護技術を実施したことについての自己評価

	ベッドメイキング	環境整備
介護方法	<ul style="list-style-type: none"> ・履修した方法と違った。(32) ・ボディメカニクスが活用できなかった。(3) ・ボディメカニクスが活用できた。(2) ・基本は同じ。(4) ・しわをつくらないことができた。(8) ・三角折ができた。(5) ・中心線に意識した。(1) ・下シーツは同じ方法だった。(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・居室内の掃除をした。(10) ・食堂のテーブルをふいた。(2) ・トイレ掃除をした。(1) ・掃除機をつかった。(2) ・窓をあける、明かりの調整。(1) ・利用者のエプロンを洗った。(1) ・廊下のモップがけをした。(2) ・ベッド周りの整理。(2) ・洗面所の掃除をした。(4) ・はたきの使い方が役立った。(1)
利用者への配慮		<ul style="list-style-type: none"> ・利用者が行動しやすいようにした。(1) ・プライバシーへの配慮ができた。(1)
感想	<ul style="list-style-type: none"> ・すばやくできた。(2) ・すばやくできた。スタッフにより方法が違いとまどった。(1) ・職員の方が中心線を合わしたりしわをつくらないという意識がなかった。(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・午前中ほとんど掃除だった。(1) ・気がまわらなかった。(1) ・居室の温度などあまり気にしなかった。(1)
	車椅子の移動	ストレッチャー
介護方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり移動できた。(10) ・必ず、ブレーキをかけた。(4) ・段差の操作ができた。(4) ・坂の走行ができた。(3) ・段差の大変だった。(2) ・悪路の走行をした。(1) ・移動速度が遅かった。(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ方法だった。(1) ・必ず手すりをあげた。(1) ・足側から進めた。(1)
利用者への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・声かけができなかった。(3) ・声かけができた。(13) ・利用者の体位に気がつけた。(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に気を付けができた。(1) ・利用者の様子を見ながらできなかった。(1)
感想	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の方が2～3人をスピードで移動していた。私はあおられているようだった。(1) 	

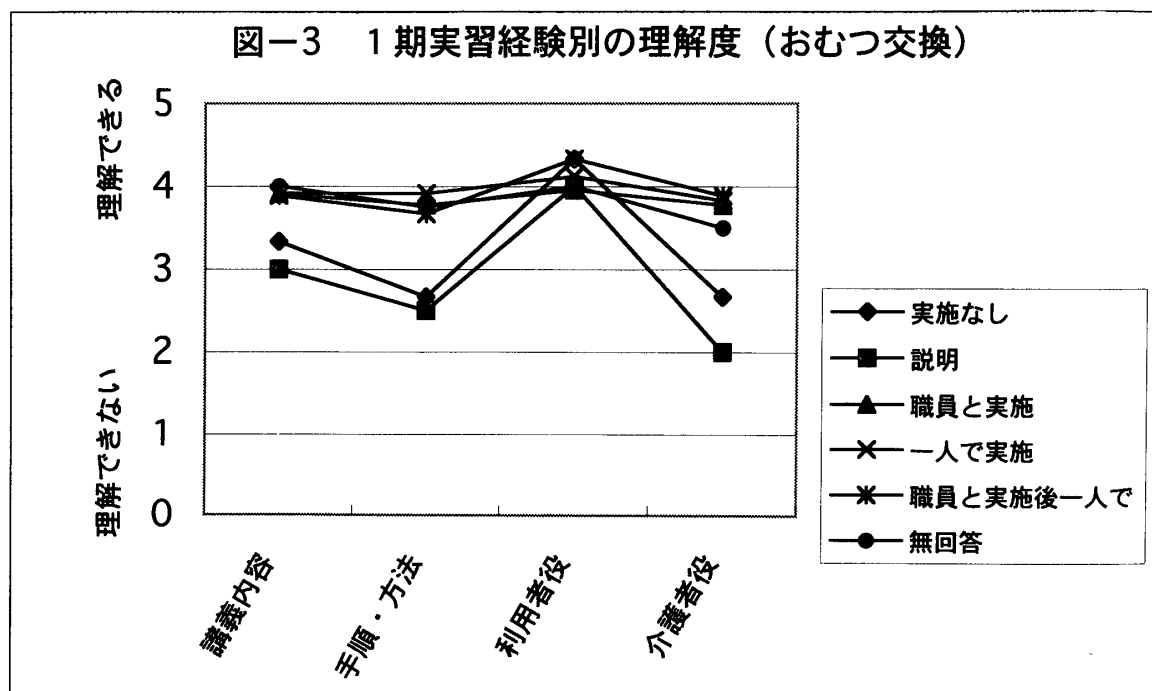
	食事	コミュニケーション
介護方法	<ul style="list-style-type: none"> ・学んだ方法でできた。(8) ・食べ物を口に入れるタイミングが難しかった。(4) ・一口の量がわからなかった。(3) ・口の中に残っていないか確認しながら行った。(2) ・ストローの使い方が生かされた。(1) ・むせたときの対応がわからなかった。(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションテクニックが活用できた。(13) ・目線の高さを合わせ会話することができた。(5) ・コミュニケーションテクニックが活用できなかった。(2) ・相手を尊重して行った。(3) ・話をすることができた。(12) ・楽しく会話できた。(3) ・利用者の気持ちを聞いた。(2) ・意図的に話しかけた。(3) ・普話が盛り上がった。(2) ・利用者の名前を覚えたことで話し掛け ・タッチングをしながら行った。(2) ・安くなった。(1) ・笑顔で接した。(1) ・話を聞くことが多かった。(1)
利用者への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・声かけができた。(18) ・利用者のペースに合わせてできた。(5) ・職員に比べるとペースがゆっくり過ぎた。(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に会話できなかった。(8) ・特定の方だけしか会話ができなかった。(5) ・聴覚の方との会話が難しかった。(2) ・インタビューのようになってしまった。(2) ・会話が続かなかった。(2) ・痴呆の方とのコミュニケーションが難しかった。(1)
感想	<ul style="list-style-type: none"> ・誤嚥しないようにできた。(4) ・学内での利用者役経験が役立った。(2) ・学内と実際では違っていた。(2) ・一度に2人をうけもった。(2) ・スプーンの使い方、食事の勧め方をもっと知りたかった。(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に会話できなかった。(8) ・特定の方だけしか会話ができなかった。(5) ・聴覚の方との会話が難しかった。(2) ・インタビューのようになってしまった。(2) ・会話が続かなかった。(2) ・痴呆の方とのコミュニケーションが難しかった。(1)

3) 学生の1期実習での介護技術体験がその後の介護技術の授業に与える影響

学生が1期実習で体験してきた介護技術が、その後の介護技術の授業にどのように影響されたのかアンケートをとった。(図-3、4、表-2、3)

1期実習での実施体験が、その後履修されたときの理解度を、講義内容、方法、利用者役、介護者役に分けて調査した。(図-3、図-4)

1期実習の介護技術の実施体験で、どのようなことを学び、その後の介護技術の中で実習内容とのギャップや違いについて自由筆記をしてもらった。その内容については、介護技術の方法・環境・利用者への配慮・利用者の様子観察・学生の感想に関するものに分けられた。(表-2、3)



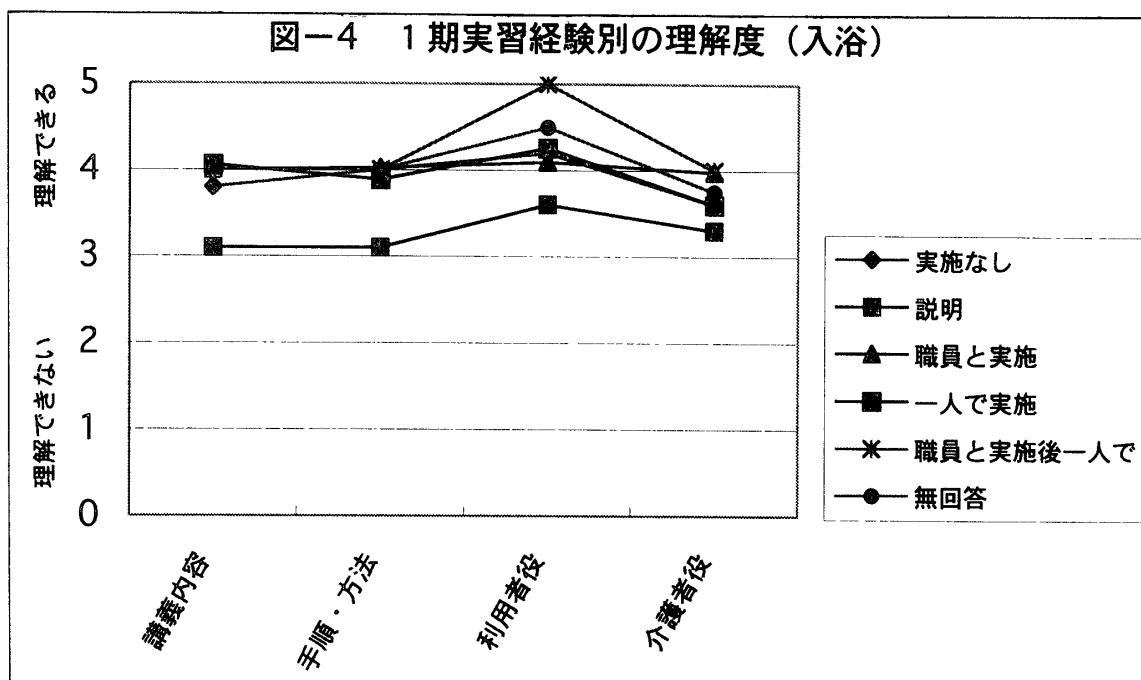


表-2 1期実習体験後に履修になった場合の学習効果（入浴）

入浴方法	①1期実習で経験して良かった点	②1期実習と演習とのギャップや混乱した点
方法	入浴の実際を見学できた（3） 実習で介助方法が学べた。（14）	・実習と演習はほぼ同じだった（2） ・実習と演習は、移乗の仕方が違った。（1） ・実習と演習は、シャワーの方法が違った（1） ・浴槽に入っている時間が、違っていた。（1）
環境	・入浴設備が整っていた。（10）	・入浴設備が違った。施設ではストレッチャーが壊れたり、入浴室に入るところの段差が壊れたままだった。（1）
利用者への配慮	・介助しているときに常に声かけをしていた。（6） ・プライバシーが保護されていた。（3） ・実施することで、危険のことがわかった（2） ・入浴中に利用者の好みの音楽をかけていた（2） ・利用者に合わせた入浴方法を学んだ（1） ・入浴を嫌がる方への対応を学んだ。（1）	・プライバシーの保護が難しい。 ・短時間で多人数入浴するので（5） ・窓が大きく民家から見える（2） ・脱衣場がなかった。（1） ・流れ作業的（3） ・入浴を嫌がる方への対応に混乱した。（1） ・声かけが少なかった。（1）
利用者の様子	・利用者の入浴後の気持ち良さそうな顔が見れた（6）	・ゆったりした入浴ではなかった。（5） ・多人数で入浴していた。（1）
感想		・実習で見学しても、実際に行うのは難しい（1） ・利用者の体験がないままに実習で介助したので、介護の仕方がどうであったか不安。（1）

表-3 1期実習体験後に履修になった場合の学習効果（おむつ交換）

排泄方法	①1期実習で経験して良かった点	②1期実習と演習とのギャップや混乱した点
方法	・実習で介助方法が学べた。（12） ・利用者の体型・尿量に合わせたあて方をする（3） ・手早く行う工夫を学んだ。（2） ・おむつの種類を学んだ。（2） ・人工肛門の方の排泄介助を学んだ。（1） ・男女のおむつの当て方の違い。（1）	・実際と演習では、方法が少し違った。（3） ・実習と演習はほぼ同じだった（2） ・施設では、紙おむつと布おむつを一緒に使っていた。（1） ・男性の陰部に当て方が違った。（1）
環境	・二人一組の方法を実習で学んだ（1）	
利用者への配慮	・実習ではプライバシーの保護がなされていた。（7） ・職員が手早く行っていた。（4） ・おむつ交換時の配慮がわかった（3）	・忙しく行っていた。（6） ・プライバシーの保護がされていなかった。（5） ・少し乱暴な交換をしていた職員もいた（2） ・声かけが少なかった（1） ・おむつ交換は、介助者中心の介助になっていたと思った。（1） ・手袋をする施設しない施設がある。（1）
利用者の様子	・実習では、利用者の気持ちを感ずることができた。（5） ・声かけや接し方が見学できた（1） ・利用者の健康状態も見ることが学んだ（1） ・利用者の立場にたったおむつ交換をしていた。（1）	
感想	・利用者の体を支える力加減が難しかった（1） ・おむつ交換の大変さがわかった（1）	・実際には抵抗があった。（1） ・職員が怖かったので混乱した（1）

4. 考察

1) 1期実習の介護技術の実施

今回のアンケート調査で、履修が済んでいた、食事（96.8%）、車椅子の移動（87.2%）については、ほとんどの学生が実施している。しかし、環境整備、ストレッチャーの移動に関しては約半数以上が実施する機会がなかった。環境整備について実施していない原因は、施設側が実施していなかったか、実施していても学生の実習計画内容になかったか等であると推察する。

未履修の介護技術の実施について多かった項目は、着脱、おむつ交換、体位変換、歩行介助であった。いずれも富所らが行った実習での介護技術習得の自己評価において習得状況が高い項目でもある²⁾。これらは、未履修の介護技術項目の中でも初回実習から実施機会が多い項目としてあげられる。

全体的にみると、5日間で予想以上の介護技術を実施していることがわかった。介護学生は、入学後2ヵ月余りでは履修できない項目まで、職員と一緒に実施している。このことから各施設の職員は、介護学生の実習のためにかなりの責任と指導を行っている現状がわかった。

また、当短大では、指導者会議や事前打ち合わせを行い、目的や内容を説明して指導者に理解と協力をいただいている。さらに、教員の巡回により実習調整も行っている。しかし、一度の実習期間に40余りもの実習施設で行うために、施設での実習体制の違いにより、実習がどのような目的・内容であるのかの認識のずれが必然的に生じてしまう。学生を指導する施設職員全体に実習の目的・内容等を認識し、指導してもらうのは困難である。

さらに、学生が1期実習に一人で行っている介護技術の内容のうち、医療的技術（つめきり、与薬）が高い経験率で示されている。昨年調査でも、1・2年合わせてこの医療的行為の高い経験率が示された²⁾。この入学後2ヵ月余りの1年生にも5人に一人の割合で経験してきている。施設現場での医療的行為の実践を認識のない学生が行うことで介護事故の発生が懸念される。早急に学校側が、施設に指針を示す必要性が迫られている。

以上のことから、学校側は、実習施設に対し、①今までと同様に指導者会議や事前説明、巡回等において、実習目的内容を説明し、協力を行う。②履修状況も確認しながら1期実習は、介護事故を回避するために、職員と一緒に実施するか、職員の見守りで実施できるように依頼する。学生に対しては、①実習内容の確認②医療的行為にはどのようなことがあるのか③履修していない技術については、行ったことがないことを職員に申し出て、職員と一緒に、職員の監視下で行うようにする。このようにして、介護事故を引き起こすことなく目的をもって実施できるようにしていきたい。そのためには、実習指導や介護技術の講義時間を使い、学生に認識できるように教育していく必要がある。

2) 学生の1期実習において履修した介護技術についての自己評価

1期実習において履修した介護技術のなかで、食事(96.8%)、車椅子の移動(87.2%)は、多くの学生が実施できた。その上、これら履修済みの介護技術は、「まあまあできた」、「できた」と自己評価した学生が多かった。実習で、「できた」という評価は、自己効力感を高め、次の実習に向けての動機付けや原動力になりうる。そのためには、対象のニーズにそった技術ができるよう、根拠のある技術を習得するための講義・演習内容をさらに検討する必要がある。

学内で基礎的な技術をマスターするための教授法、内容、演習方法など検討していく必要がある。自由筆記からは、介護方法のみならず、利用者への配慮とりわけ「声かけができた」という回答が多かった。演習で強調している利用者に同意をとる行為が意識的に出来ていると考えられる。コミュニケーションについては、コミュニケーションテクニクを活用できたとの回答が多かった。また、会話ができたと回答した学生が多く、精神的には満足のいく実習になっていた。一方で、会話ができなかったと感じている学生もいた。つまずきや気がかりを残した学生は、個人的にフォローが必要である。

3) 介護学生の1期実習での介護技術体験がその後の介護技術の授業に与える影響

介護学生が、1期実習で未履修の介護技術を体験してきて、その後履修する場合の学習効果については、介護技術体験の有無の人数にばらつきがあったため、比較検討できなかった。図-3, 4は、参考までに1期実習の経験別に平均値を求めた。

自由筆記による回答においては、数は少ないものの、学生が実習で介護技術の方法のみならず利用者への配慮や様子を観察してくることができている。とりわけ、プライバシーの点については、指摘が多く、関心があった。また、配慮している点・疑問点など学生なりの意見をもっていた。介護学生の感性を大切に、現状に満足しない気持ちは、今後も持ちつづけられるようにしていきたい。そのために、これまで通り手技としての内容だけでなく、対象者へのこまやかな配慮についても講義・演習に含め、対象者一人一人を尊重していく姿勢を育成するような教育を行っていくことが大切になる。

5. おわりに

今回、1期実習における介護技術の実施に関する実態を調査することにより、以下の結果を得た。

- 1) 履修の済んでいる介護技術に関しては、実習での実施率も高く、学生の自己評価も高かった。

介護方法や利用者への配慮に関する評価が高かった。対象のニーズに合った技術がで

きるよう、根拠のある技術を習得するための講義・演習内容をさらに検討する必要がある。

- 2) 未履修の介護技術に関して「職員と一緒に実施した」「一人で実施した」介護技術も数多くあり、医療的行為については、5人に1人の割合で実施していた。知識・認識のない学生の実習内容や指導に検討が必要である。
- 3) 1期実習に未履修の介護技術の実施を体験した学生は、介護方法のみならず、利用者への配慮や様子を観察してくることができていた。とりわけ、プライバシーの点については、指摘が多く、関心があった。学生の感性を大切に、対象者一人一人を尊重していく姿勢を育成するような教育を行っていくことが大切になる。

6. 引用文献

- 1) 南原 友枝：介護実習中の事故の現状と事故防止教育の必要性、第9回日本介護福祉士教育学会発表収録集、124—125、2002
- 2) 富所 求 他：介護技術チェックリスト活用による実習評価の検討、第7回日本介護福祉士教育学会発表収録集、64—65、2000